

南部馬の種類

滝尻 侑貴

(八戸市立図書館
歴史資料グループ
主査兼学芸員)

今年の干支は丙午（ひのえうま）

である。青森県で馬といえば、やはり南部馬が思い当たるだろう。平安時代に糠部（ぬかのお）の駿馬が資料に登場して以来、糠部（青森県東部、岩手県北）は良馬の産地として

近代に至るまで有名だった。

しかし、南部馬は近代になって洋種馬との交配が進み、現在は絶滅してしまった馬種である。今回は、この絶滅してしま

った南部馬の種類について、明治時代に記された資料を紹介する。資料は、1888（明治21）年4月に刊行された『農学会会報』1号に、「南部馬種」と題し

廣澤辨二が寄稿

したものである。彼は、三沢に牧場（後の広沢牧場）を開いた廣澤安任の甥で、後に安任の養子となった人物である。

寄稿した頃の

辨二は、188

6（明治19）

年に駒場農学校

（東大農学部な

どの前身）を卒

業し、安任から

牧場経営を継い

だ時期であり、

2年後、牛馬買

い付けに渡米している。辨二はその後も馬産振興に努め、さまざまな要職を歴任し、ついには国政選挙に出馬し衆議院議員となった人物である。

辨二は「南部馬種」の中で、南部馬と一口にいつてもいくつかの種類があるとして、ここでは、田名部・三戸・八戸・五戸・三本木・七戸の6種をあげている。それぞれの特徴を見てみよう。

○田名部種は、荷馬車用に適してお

り、大きさは南部馬の中で最小で

ある。青毛の馬が多く、体格は強

健で骨太、四肢は堅い。

○三戸種は、乗用に適している大き

めの馬である。鹿毛が多く、体格

は胴が短く、足が細く長い。

○八戸種は、荷運び用に適してお

り、大きさは南部馬の中で最大で

ある。鹿・栗・青毛の馬が等しく

おり、胴が短く、足が長い。

○五戸種は、温厚で乗用に適してい

る。鹿毛が多く五戸鹿毛と呼ばれ

ることもある。四肢は細めであ

る。

○三本木種は、温厚で乗用に適して

いる。青毛が多く次いで鹿毛が多

い。外観が美しく顔は品位があ

る。この中の一種に、法量種とい

う強健で骨太な馬車用の馬がいる。この種はかつて木崎野種と呼ばれたものである。

○七戸種は、乗用や荷運び用に適している強健な馬である。青毛が多

く七戸青と呼ばれることもある。

外観は遅しく、特に尾駁産は眼に

威光がある。

以上、簡単に要約した内容であるが、この他に、野辺地種がいたり、6種のなかでもさらに分流があったりするとともに記している。

南部馬に関しては、絶滅してしまつたため、文字から想像するしかないが、実は十和田市馬事公苑の称徳館で、南部馬最後の名馬といわれた盛（さかり）号の復元模型が展示されている。特に現在、特別展「一人馬 一体く人と共に生きる馬」（6月7日まで）で特集されている。

盛号は、1872（明治5）年に三本木で生まれた青毛の牡馬で、1885（明治18）年の上野不忍池競馬に出場。外国産馬種が混じる中、優勝した馬である（翌年も優勝している）。

南部馬を見に、ぜひ足を運んでみてはいかがだろうか。



「盛号」(復元模型) 十和田市馬事公苑 称徳館